溫故雜帖

第六

チ
2715
6

特
1715
チ
2715
6

第六巻

蒲生氏郷自筆消息 一
近松門左衛門自筆書簡 一
源家長筆朗詠切 一
源家長筆朗詠切 不揃一
桂離宮 一
義政和歌 短冊 一
支那留学生筆 一
太閤と書翰 一
仏法大師七祖と賛 不揃一
今上陛下 一
元禄頃の遊女の文 一
元政筆 一
元政筆 一
元政筆

光源院殿義輝公御書

馬一疋
若狭以令現金壱貫
拿上者可越人
於路次之状如
件

五月廿六日　晴

本院實開東古刹所蔵名公鉅卿古文
書若干紙皆係當時贈答馬目今謄寫
二三紙以附剞劂而弘傳云
天保四癸巳陽月
[illegible]

管領細川右京大夫高國入道道永書

十六日 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十月廿日　　高國

謹上　[illegible]別當坊

本院實開東古剃[illegible]藏名公鉅卿古文
書若干紙皆係當時贈荅焉目今謄寫
二三紙以附剞劂而弘傳云

天保四癸巳陽月

閑居

不獨記東都履里有閑居叢之
與之令知皇唐大和感有理世安樂
之音白

宮車一去攀臺之十二空長隔馬鹿難
追綺羅之子晴光閑賦

幽思不窮深巷無人處穂腹欲訪閑
窓有月之時白

鸛籠閑處見君子嘉巻展時金
故人白

官途自此心長別世事從今日不
言白

蕙帶蘿衣抱磬於北山之蘭橈桂
檝鼓棹於東海之東江相公

都府樓纔看觀音寺只聽
聲不出門前

陶門臥疴者朝雨燕寢色衰秋色
相霜閑中日月去ル言

我屋广先失地也雖生芝草
芝生乾元元年芝草生ル地ニ

眺望

風飄白浪花千片鷹點青天字
一行白

出墜圖而東望山畝生雲根之暗
瞻翠嶺而頽望卿巷沒煙樹之深百姓

見天台山之高巖四十丈波自墜
長安城之遠樹百千万塵霧青順

每部有畫章記歸

右山本覚一氏とは、京都市市会議長寺町通四入に住む、先帝の頃より宮中に出入し、有名なる考古家、鑑定家なり。

二位の局とある故、今の正一位中山の局、その頃二位におはしければにや。〔編輯だより・参照〕

5

仙臺　岩淵廣所藏

梅澗筆　錢舜舉筆

林子平墓

林子平傳

林子平名友直字子平仙臺人父源五兵衛自號三橋翁子平幼而穎悟好讀書博聞強記年十五從一位熟一等三修實美藤顯正四位熟一等伊藤博文記

仙臺藩士林子平墓表

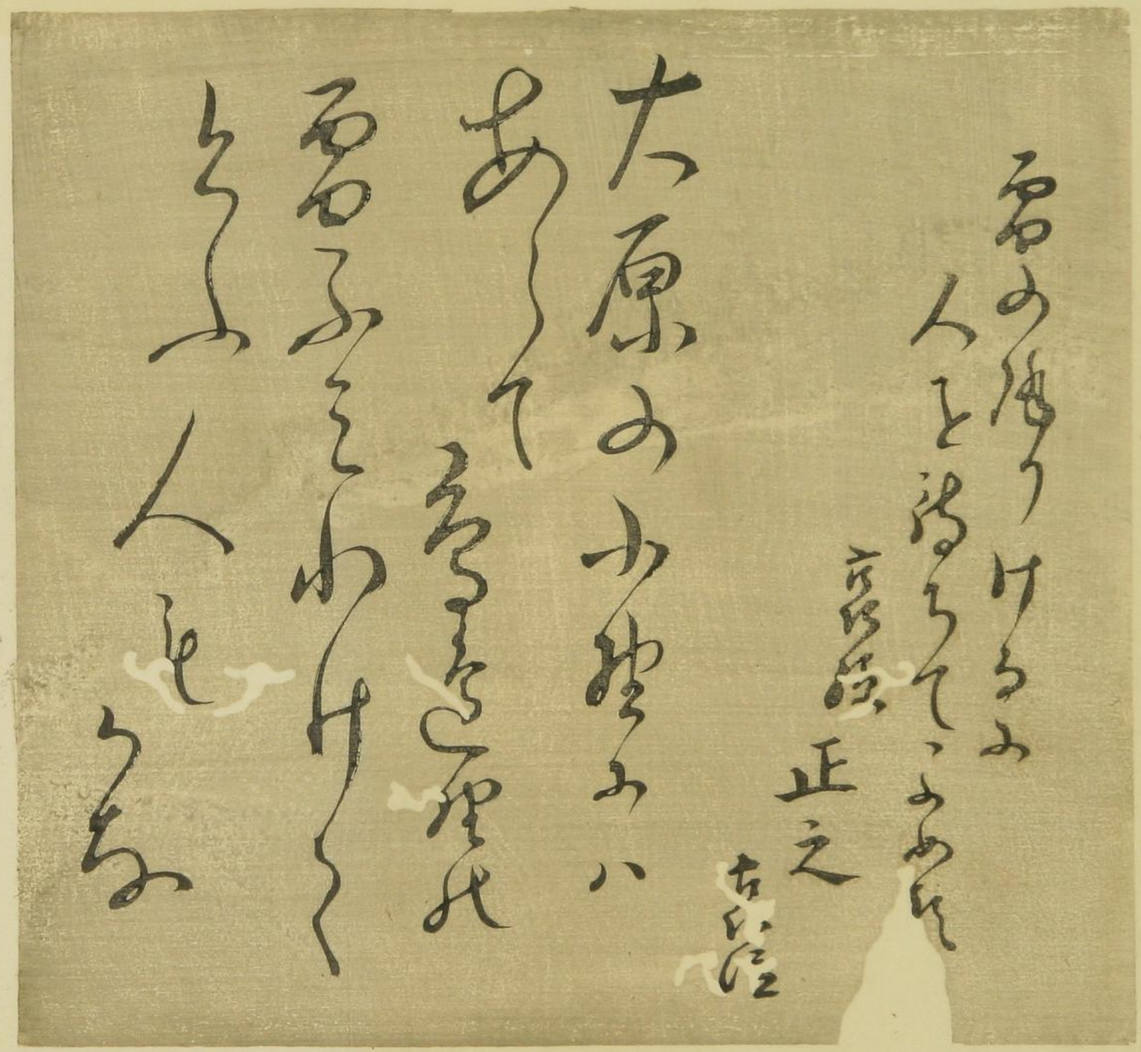
嗚呼此仙臺林子平之墓也子平名友直字子平仙臺人父源五兵衛自號三橋翁子平幼而穎悟好讀書博聞強記年十五從一位熟一等三修實美藤顯正四位熟一等伊藤博文記

林子平墓

林子平墓

林子平墓

林子平墓



高山彦九郎諱正之字仲縄号赤城又金山常噗
王綱廢弛慷慨奮激周游四方是亦之所知也後有
故自盡筑之久留米實寛政五年癸丑六月廿七日
也法諡曰松陰叹白居士ゝ在祖毋喪而廬冢上
三年數作和歌暢懐是其所手書於余家又矣今摸
刻以詔同志云尓

錦所吉田豐識

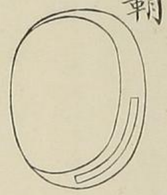
文房四賢之一藤樂院大相國 近衛家熙公の造らせ給ひしと古の四君子の撰して四賢と称し自ら四賢乃詩を綴らを乞ひ白石先生姓名を乞ふ三宅緝明侍を著し一事迫世の名器ありう雅趣湧禄よ図を載あまたも軽しかう次とい大和国乃手法ふ枝を持つるとうてて世ふりあるく をんとを移ふまの形ふ享和四年四月日

源弘賢

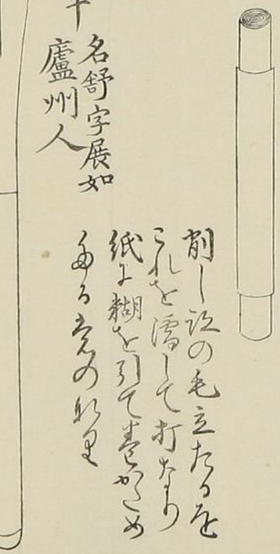
劉司空 名改字去非鐵嶺人

誤字を削る小刀なり趙宋の釋圓智が雨花編よ刻字刀の話あり そんなものやうひよう也 なん

鞘

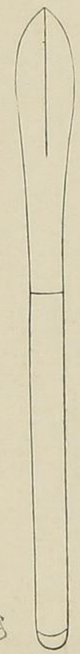


胡補闕 名濡字典之管城人

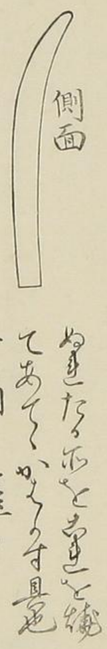


削し込の毛立たるを ふれを落して打なり 紙よ糊とりてまきつゝめ あるをのの形ふ

温平章 名舒字展如 廬州人

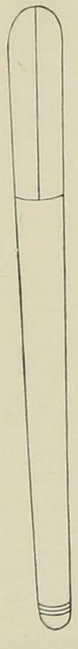


側面

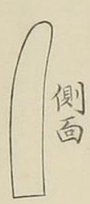


牽たる形を表 てあてくかもう手 管鋼もて造る

牙光禄 名磨字子華 象郡人



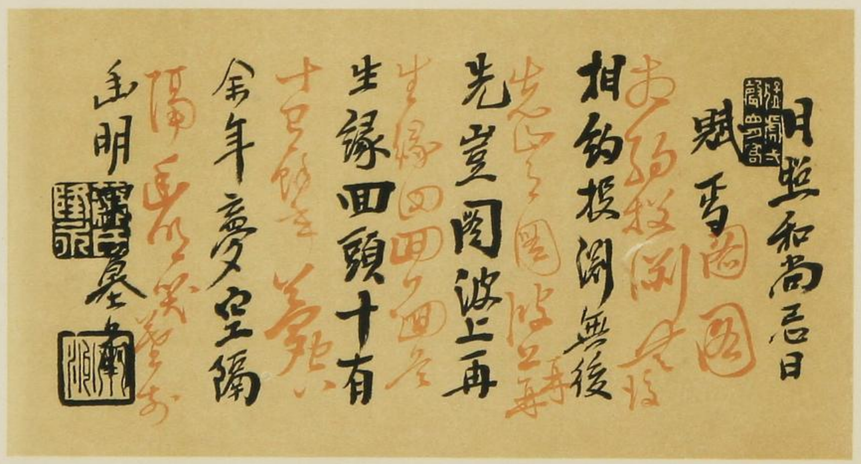
側面



かゝ紀たるう人ゝとする 器なもも象牙と用

月照和尚忌日

題 雪



相約投淵無後
先豈図波上再
生縁田頭十有
余年夢空陽
玉明薄命南洲

月照

星霜なきさきの身ぞ
さつま潟沖乃はるかを
恋うらく入めり

大空のつきはてを
をしうらさまとを
永を志つむとや

南洲月照と相約て薩海に投ぜしや抱沙の境中せし
和歌の紙を得て乾うて能く
御覧に供す

寛政中六会亥年六十自賀初度
之筵大會都下飲士咄一時海龍也
各一飲一斗或有傾四五斗者可謂
太平之盛事矣古人以酔人為
太平之瑞宜哉余在其坐而親觀
之時文化十二年乙亥冬十月廿一
日也

海龍君飲似争珠
雙手擎来傾五湖
不是伯倫七賢伯
定應李白八仙徒

太平酔民鵬齋

かの北夷坊狩次ゝ此上
行ゝ酒のことく
ちゝ
慶あ二年のまつり
ここ千歳のまつり中六め
六十の賀に酒粘て
かちわちゝきて
男山人

よろこひのまきといふる
ゝの名をお卦うての
酒よろこめ

展觀書畫小集

三月二十又九日
諸先生席上揮毫

出

藍梁先生　半香先生　訥菴先生　甘棠先生　水石先生　貞軒先生　文雄先生　愚洲先生　南華先生　凌雲先生　蔣塘先生　磐溪先生　椿山先生

補助

石井五右衛門　井吉兵衛　吉澤兵左衛門　吉澤淺右衛門　野口竹次郎　小室宗助　加藤弥作　池澤兵右衛門　善野伊兵衛　福嶋五左衛門　齋藤佐市　舩江啓次郎　大野孫輔　田部井周輔　小林六兵衛門　金澤利右衛門

會幹

小山梧岡　和氣芝溟　寬亭清水竹雨　佐藤七郎右衛門　金澤和吉　小林昌藏　杉汐三郎　宮坂屋孝兵衛　金澤啓太郎　鈴屋仲八　新濱百屋　小林千代吉　前屋正輔　宮杉忠兵衛

幹司　小山霞外
會主　岡野竹癡

百華

柄木惣連

本日於柄木邸迎流觴舍小集和使之四方之諸君子云　漪時壽陽書

元政名日政号春堂本彦根藩石井氏子
後住深州瑞光寺寛文八年寂歳四十三
政公書安傳甚少此書藏舊藩小野田氏
經由極公而筆法遒秀乃喜因摹刻以
傳爲天保壬寅春王

香雪山魯記

桃太郎 誦句

硯堂先人 筆

ゐよゐ桃太郎 ももの場よ
ゐなゐは
ゑ〜ゐ人 をよくなりけ
日本の徳を小蒙らせ
一匁の寶をとりのり

天皇陛下 よりよろこびを
めいさを 顕さな
我等も めいち 毎と人な
よろこびを
ももとる 忠
ももとめい 親よ 孝
あらよろこび 桃太郎
めいを 紀臨さよ

ゐのもとを 神代より
いと百代の天皇の御位
さのゆるぎなく
ささのおの国體ハ
能あるひとをまもりおお
孝ある国をよろこまもりけ

神武天皇 神代のうけつぎ
もりこと
國をひろめて人を增し
つまき物をさんみ〜
人のまことのつとむべきみちを
ひろくさをして
手弱女のたをやぎさをも
桃の花さき実もむすひ
のりをのまよ 桃太郎一議員となれることあらは
國の事一業を大なせよ 少なるとよそねまひ
あやまちは

忠孝勉強怠るなかれ

倣芳年山筆意

Lof Zang van de Kameel

O Kameel, Gij Zijt Een der Vreemde Dieren,
Geboortig van Indien,
Gij Zijt nu hier in Japan aangekomen,
Gij doet ons Volk van de moeite bevrijden,
Die hij in't overvoeren ondergaat,
Gij Zult dushem Zeer veel Verpligten.
op't Verzoek van den Heer Woorabeno Toektomi,
Dicht Ginoot van Jomono Magaro.
door Jg. S.W. Tjeuzho Gemaakt.

鳴呼駱駝汝印度ノ産ヲ以テ奇獣ノ一ナリ我
日本ノ事ヲ專ラ運輸ノ労ヲ為ス
カレーむ友ヨ法人其功ヲ偉ク
ス可シト言フ
四方真敬徘偕歌連中浦邊種富君
乃需ニ應テ　吉雄忠次郎書

駱駝

西洋文 駱駝ハ資

亞剌比亞國中墨加ノ産牝壯舶載
ニ内モ牝ハ生ル二年ニ子ヲ産ミ壯年五歳ヨリ

面の長	壹尺九寸
領の長	四尺
前足跡ヲ距ヲ	五尺六寸
後足同	五尺八寸
腹ヨリ背ヲ	三尺三寸
尾の長	弐尺四寸五分
前足底	七寸五分
後足底	七寸

あゝひやらくたを
初の名ニて千里の
客あり時候
あゝひやすとを
むくやわらく
年甘政壹

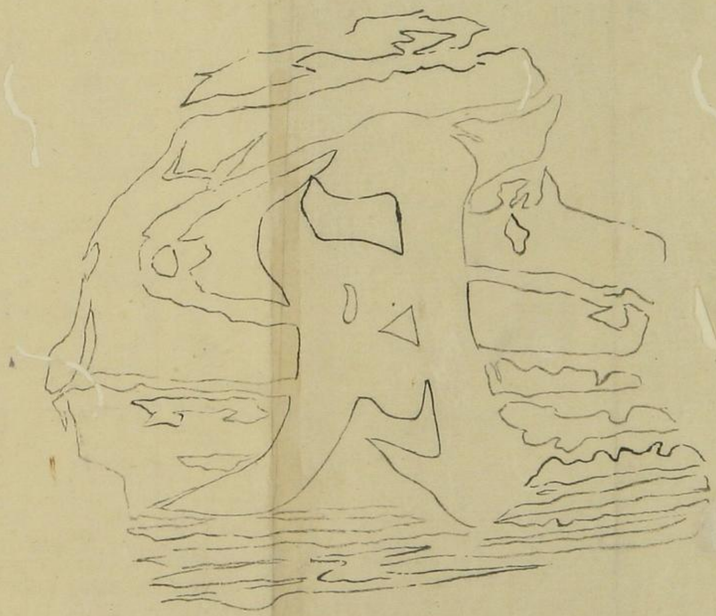
千金氏主前ニおらくごそ着中ニよろきカ痛あり
て芒二の絵跪も仲ちろうしそ
ろまほうびあもつびらくとの歌のつゝそをうろる
人の面恐のらをと待ろもそらくをくろみらくごか

藪中道
屯々舎田室
生花齋八平
五楊舎福富

壬午四月吉辰

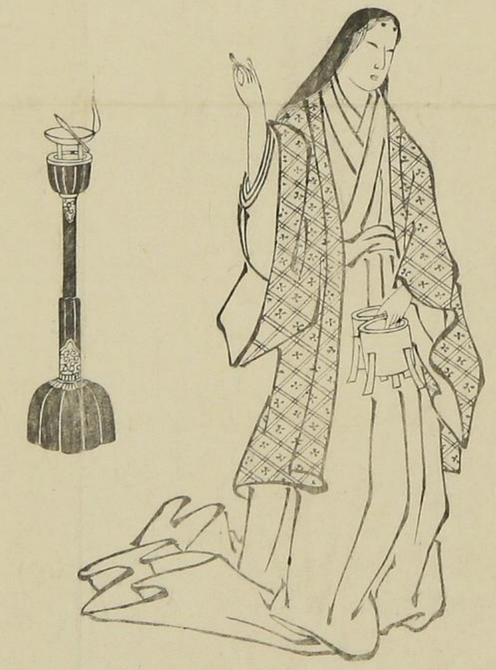
節分豆打圖考

松之舍源與清藏



備多郡井田浦松山寺額

紀貫之真蹟



勾當内侍 第一掌侍。或豆打。又散油燈臺。圖以平戸落士山本景興所藏。

土佐守藤 光貞朝臣古圖。同藩士井手利恭摸寫之者也。

水本乃 正恵 慶喜代

○躬恒集。おにのはごろもの夜儺の巻をいふ。

[illegible]のくれの夜のふかきにそ鬼やらふ声とともにや人のおどろく

とぢろめや鬼やらん。糸に危おくとて。年の穀物をとりそろへ食の穀ものをおりて。[illegible]やくとていくたびもやらふ。○當時年中行事上云所なり。

次ま豆三ま入。次ま豆を供む。次ま折榲二。是をよそ三方にとるともまの中なる是のうへにおりひらく土器とを。右のやうにそ吉方へ三方に置せの陪膳うりて勾當ひけ。勾當二の折と左の上まで。とうろうぐる此間ま土器に入なる豆をとる。年だけ粉まるる勾當次第に土器をとりて。廻一の女中次第にそくく。その後勾當内侍まで。夜中とねてめぐる。次ま銚まいつれ盃まわりて。一献毎に菜を撤して。さて直衣めしまして。陰方遠にうる内侍燭をおりてまるる。後にハ女中福まで。まそひまるる。三こんめ天酌みて。女中男取通一うろ菜と撤して。夜上へ雑三番まれ後還御

使内舎人従六位下安倍朝臣廣庭為太上　天皇
御霊宜令奉良七大寺衆僧
一七日讀経者今依宣百伴人老
使令賚名香向東大寺七寮
此状始自今月廿六日迄于来十月
三日如法行道至心讀誦委曲之
旨勿乖使口

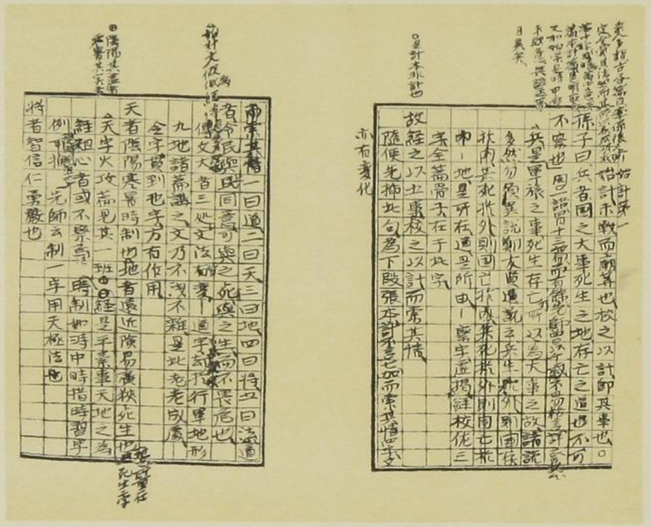
延暦廿四年九月廿四日

十六帝陵 巻二
古真道卿真蹟在於東大寺
奈良県大和古寺墨蹟大観 古寺新造舎文庫

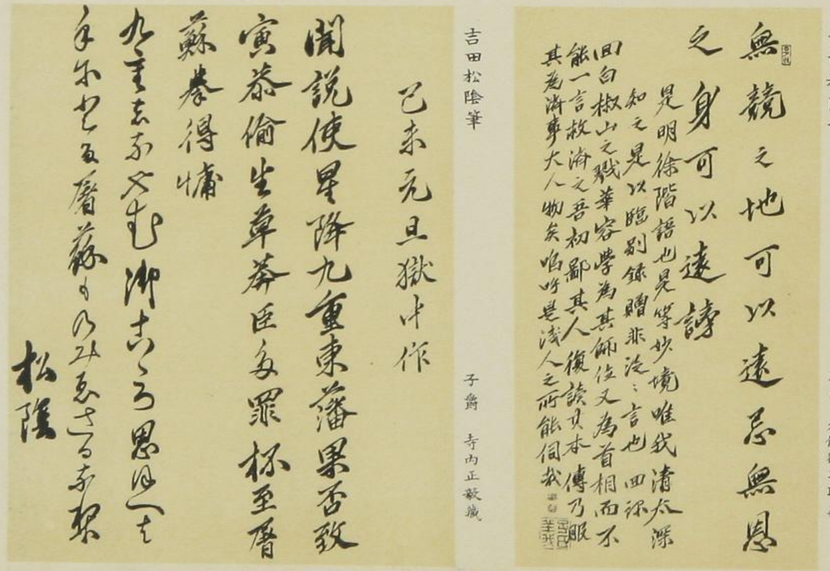
名[illegible]

丁寧此ノ如キニ至レリ文ノ内侍ノ宣ヲ被ル云々[illegible]

私用ノ文ニ非ス然レニ其書式太政官符ニ非ス辨官ノ牒ニ非ス公式令ニモ類例更ニ見聞及ヒ[illegible]
レ一種ノ奇格ナリ○使人廣主履歴未考○太上天皇ハ光仁天皇也天應元年四月讓位ニテ
十二月廿三日ノ崩御ナレハ今年廿五箇年也十月三日ハ聖忌ニモ非ス臨時ノ御齋ヲ欤○九月廿六日ヨリ
始テ十月三日ニ至ルマテヲ限レルヲ上文ノ七日ニ合考レハ八月大九月小ナリ通暦ニハ小九大トセルハ實暦ニ不合也
紀略ニ十月丁酉野鳥飛入殿中トアレ小恠ナレ十月二日丁酉ニテ滿願ノ前日也故アヘテ今年桓武天皇御
不豫ノ寔中ナル類聚國史卷廿四ニ今年二月庚戌詔曰トアル前文ニ去年二月ノコヲ記ノ運收大和國石
上社ニ詣テ於山城國葛野郡訖テ无故倉仆ル更收新庫既而聖體不豫ト見エ此頃前後崇道天皇怨
靈鎮謝ノ爲ニ寺ヲ建經ヲ寫レ稅倉ヲ造リ又御惱平愈ノ御祈ニ諸國國分寺ニテ藥師悔過ヲ行ヒ
八九月ハ僧最澄ヲ殿上ニ召テ思靈遮那法ヲ行レナト混雜ノ中ナレハ種々ノ妖語モ挾リ易ク太上天
皇御靈鎮謝ノ修經ナト云名目モ涌出マレキニ非スサテ明年三月崩御坐レ也又紀略ヲ按ルニ延曆
四年九月廿三日皇弟早良太子ノ變起リテ廿八日出置レ訓寺是後太子不ル飲食積十餘日駕
舩移送淡路北至高瀨橋頭已絶載屍至淡路葬ト見エタル文ニ是後斷食十餘日トハアレト
實ハ九月廿四日以來ノ十餘日ニテ十月三日ハ絶々ナル御命ナルヲ強テ乙訓寺ヲ出メ舩ニ駕マヰヲモ
タレハ程近ケレト高瀨ノ淀山埼ノ橋邊ニハ既ニ終ラセタマヘリト見ハ十月三日ノ御忌日ニテ即是
崇道天皇ノ御ナリ然ラハ亦太上天皇ノ贈号モ有ケルニヤ○真道卿ノ出自ハ續日本紀延
曆九年七月辛巳ノ條ニ圖書頭從五位上兼東宮學士左兵衛佐伊豫守津連真道等上表言
真道等本系出自百濟國主貴須王トアリテ應神天皇ノ御世ニ貴須王ノ孫ナル辰孫王トヽ云
人來朝ノ其玄孫ナル辰爾ノ時兄弟三人葛井、船、津、ト三姓ニ別レ由ヲ錄レ其文ノ末ニ代至
改換連姓蒙賜朝臣ト乃引續キニ於是勅曰宜賜姓菅野朝臣ト見エ十三年勅ヲ奉テ
續日本紀ヲ撰修セラレナ廿四年正月爲參議ナル紀略又類史等ニ載セ公卿補任ニ參議
年六十五弘仁二年正月十日致仕トニ薨年七十四ト見エタリ終身ノ歷任ハ補任ノ在ルアリ今
略之○續日本後紀承和四年二月庚申從五位下菅野朝臣永岑言亡父參議從三位真道
朝臣奉爲桓武天皇所建立道場院一區在山城國愛宕郡八坂鄉中略道俗号曰八坂東院
云々トアルヲ一代要記又以呂波字類抄等ニハ真道卿雲居寺ヲ建立ト記セリ



吉田松陰孫子評註手稿　東京　久保畿次郎藏



吉田松陰筆　東京　久保畿次郎藏

吉田松陰筆　子爵　寺内正毅藏

吉田松陰和歌

東京　吉田庫三藏

東におもむかんとする時一首を餞して
兒玉の小姪に與ふ　松陰

今さらに驚くへくもあらねなり
かねて待來しこの度の旅

吉田松陰筆

東京　入江貫一藏

臣罪如山今日行歟與何顏拜帝京上林陰雨愁難霽東海風波險未平無補蜻洲千歳業空偷蠹簡百年名極知汝痛加人痛眞淚神交隔世情
己未五月求江子遣近詩韻却贈子遣云斷琴感切終身誓歷此韻矣其言最可泣也

二十一回生

孫子評註

東京　久保畿次郎藏

始計第一

始計未戰而廟算也校之以計即其事也前人多謂古書篇目率係後人所定今覺其信然而其所以名或取篇中字或暗含篇中意此篇本唯計篇是明取者又加始字是暗中含未戰意與語孟篇目異矣

孫子曰兵者國之大事死生之地存亡之道不可不察也

開口一語冒十三篇而有餘先師曾以千歳不易格言評之旨哉兵是軍旅之事死生存亡乃所以爲大事之故諸說多然勿須異說地是所在道是所由察字虛揭下經校佐三字全篇骨子在于此字故經之以五事是計本非計也校之以計而索其情

隨便先抽此句爲下段張本計不言七加而索其情四字文亦有變化一曰道二曰天三曰地四曰將五曰法始計文假爲經傳者是其證也道者令民與上同意可與之死可與之生而不畏危也

傳文大者三處文法皆變道字不甚說破却於行軍地形九地諸篇講之文乃不淺不雜是此老老成處令字貫到也字方有作用

天者陰陽寒暑時制也地者遠近險易廣狹死生也天字火攻篇見其一班陰陽其虛者寒暑其實者時制如時中時措時習字例隨時制宜也先師云制一字用天極法地之所重征死生二字經是平素事天地之爲經粗心者或不察焉

將者智信仁勇嚴也

吉田松陰筆

東京　久保畿次郎藏

無競之地可以遠忌無恩之身可以遠誇

是明徐階語也是等妙境唯我清太深知之是以臨別錄贈非泛々言也

回白椒山之襲華容學爲其師位又爲首相而不能一言救清之吾初鄙其人復讀其本傳乃服其爲清事大人物矣嗚呼是淺人之所能伺哉

吉田松陰筆

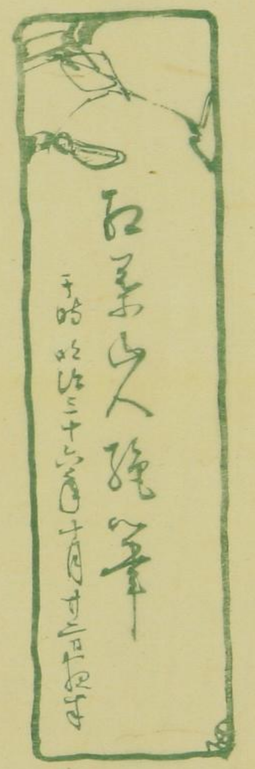
子爵　寺内正毅藏

己未元旦獄中作

聞說使星降九重東藩果否致貢恭倫生韋莽臣多罪杯至屠蘇舉得情
九重のなやむみこゝろ思ほへは
手にとる屠蘇ものみふさるなり

松陰

吉田松陰畫像は松陰か關東に檻送せらる時門人松浦無窮をしてその眞を寫さしめたるもの事は松陰か題後の文に詳なり臣罪如山の一律は入江九一の韻を次きて却て九一に與へたるものなり孫子評註は松陰の手稿に係れり此の後に門人久保清太か村塾において開雕せり無競之地の意は明の徐階の語を錄して門人久保清太に與ふるもの能く潛脩の功を積むことを囑せるなり



曲亭馬琴八犬傳全帙（袋入全十冊）

身を翔〳〵一程遠く放ち其の池〳〵と跳ぎ時よく雲漲り雨降り疾く颪風天地を震ひて黒白を別ず雷震動雷電帝眉を似るる中より龍火の光と向上れば白龍雲に川より頭れて首を伸べつ尾を全れつ巻を騰ぐる池水の雨とうるを疾八勢ひを逞ましく新離れ細雫放下まれるを足下を踊るも事ともせず親兵衛と老嬴は狂風暴雨を老嬴茶店の庇等を塗児茶器までも更に一箇もなく吹攫れて雨と遁るる術は松の梢落ち

本傳既に未二巻八回を存せり

東京石を往び。四方の有官みの彼未獲る斧の柄の朽ちを知せまく欲るを 光眼一哀 地下編

辻 不二夫

吏日輪所照係至海岳山川草木含虫
悉荷
恩光也予除
舶船之時七隅夢其夜已日光滿室
室中一行者人不勝驚懼相士相賀
占筮之曰及壮年輝德色於四海發
威光於遠方之兆異也故不憚千里之
中而
一心主有功平定海
避險猶風看怎出鄉國遠久倉浪蓋
相望結歡於道多先而服從矣朝鮮
國考自往代於
李朝七年壬辰歲久脅主約況又予徴征
大明之
有反據此故命諸將
国王出奔西城付一
大明之
不得已利来
而乞降録之築數十个城営収兵於
名辺城小慶尚道而
南筆既除去幸ニ
車而仰予徳光兵國未入華中不施
罪弥天能終不知四方事実分作主
地疎忘取原田氏孝使命予發水若
是不来和ニ令諭将於我之生民ニ物有
日也然為万物亦日也思之不具

文禄二年霜月廿日　　高山国

日本国　前関白

許可複製至制作国宝文化遺産複十帝等

奉
天承運
皇帝制曰聖仁
廣運凡天
覆地載莫
不尊親帝
命溥將暨
海隅日出
罔不率俾
昔我
皇祖誕育多方
龜紐龍章
遠錫扶桑
之域貞珉
大篆榮施
鎮國之山
嗣以海波
之揚偶致
風占之隔
當茲盛際
宜纘彝章
咨爾豐臣
平秀吉崛
起海邦知
尊中國西
馳一介之
使欵慕来
同北叩萬
里之關懇
求内附情
既堅於恭
順恩可靳
於柔懷茲
特封爾為
日本國王
錫之誥命
於戲寵貴
芝函襲冠
裳於海表
風行弁服
固藩衛於
天朝爾其
念臣職之
當修恪循
要束感皇
恩之已渥
無替款誠
祗服綸言
永遵聲教
欽哉

萬曆二十四年月二吉

此冊封豐臣秀吉之制書時悉擲於地堀尾吉晴在側拾得之後送其城主堀尾家有今被藏于尾州徳川氏家老侯閔田忖名訳之新写

此の草稿子が遺品なれば

近松門左衛門自筆

幸豪女護嶋草稿 二枚 [illegible]

安都扉娘子歌五首

三室戸月之光二首 一日相二師人一

夢西所見

みそらゆくつきのひかりのあまねくは
あまたのひとのいもをしるらむ

田部忌寸櫟子任大宰時歌四首

衣手尓取等騰已保里奚兒尓毛益有

吾手量而如何将為　舎人吉年

こころそらくにこひしきなへに
てまをとるかもとこよのごとく

●桂萬葉斷片に就いて

古筆は、美術品として愛玩すべきのみならず、古文學の研究上にも、その價値多大なり。この意味に於て、我が國の古筆中最も貴ぶべきは、凡ての古事記と共に我が古典の双壁たる萬葉集の古筆なり。萬葉集の古寫本の、平安朝のものにして現存せるは、僅に數種あり。就中、時代最も古くして貴ぶべきは、桂萬葉、藍紙萬葉、元暦萬葉の三種あり。就中、時代最も古くして貴ぶべきは、桂萬葉なり。桂萬葉は、卷四の殘卷一軸にして、始め、前田家に藏せられ、後ち、桂宮に入り、今は個物となれり。その斷片、こゝかしこに散在せり。筆者は、古雅なるを以て、珠に古筆家の喜ぶところとす。筆者は、古くは貫之といひ、小野道風といひ、吉田丹左衛門尉氏の所藏にかゝりしを以て、その名を擧げたるものなり。相從へる二葉の斷片を一つに合せ貼りつなぎ（佐佐木信綱）

祝

嘉辰今日歌

秋来

長生殿裏春秋

つまの日月を

安都扉娘子歌

三室之山

曼西所見

田部忌寸櫟子任大宰時歌四首

衣手尓取等騰已保里哭兒尓毛益有

吾手量而如何将為　舎人吉年

●桂萬葉斷片に就いて

古筆は、美術品として愛玩すべきのみならず、古文學の研究上にも、その價値多大なり。この意味に於て、我が國の集古會と共に我が古典の双璧たる萬葉集の古筆なり。萬葉集校訂のことは、萬葉集の古寫本、平安朝のもの、而して古筆に、この方面に於ける唯一の材料たり。萬葉集古寫本の中、天治萬葉、廣瀬萬葉、元暦萬葉の三種あり、就中、最も古くして貴ぶべきは、桂萬葉なり。桂萬葉は、卷四の殘卷一軸にして、始め前田家にあり、後、桂宮に入りしが、今は、御物となれり。その斷片、こゝかしこに散在せり。筆跡優美にして古雅なり、殊に古筆家の喜ぶところとす。筆者は、古くは貫之といい、順といい、小野道風とも傳えられたれど、未だ定說と認むべきなし。こゝに掲げたるは、古田丹左衛門氏の所藏にかゝり、その目ぐら上帖に收められたるものなり、相鼓ほゞ二葉の料紙、一は茶色、左は青色なり。但し、欵はつゝたるものならず、二つの斷片を一つに合せ貼りつゝたるなり（佐佐木信綱）

契恋

義政

天子重英
豪文章教
爾書萬般
皆品惟高
有讀書日
已卯春

まてーはーな
きーよのなかの
いいーまこいむ
せのゆーめのなこ
りたしーさた

たべさせる

たいしたか
らこしあ
るなつあ
ゆかいた
めてたかす
」

たこうさま
まうたいらる

ゐとゐ
りてたつ
ざまり
れにつか
われしい
ふしへて
もめす
れたふ
な

こいう

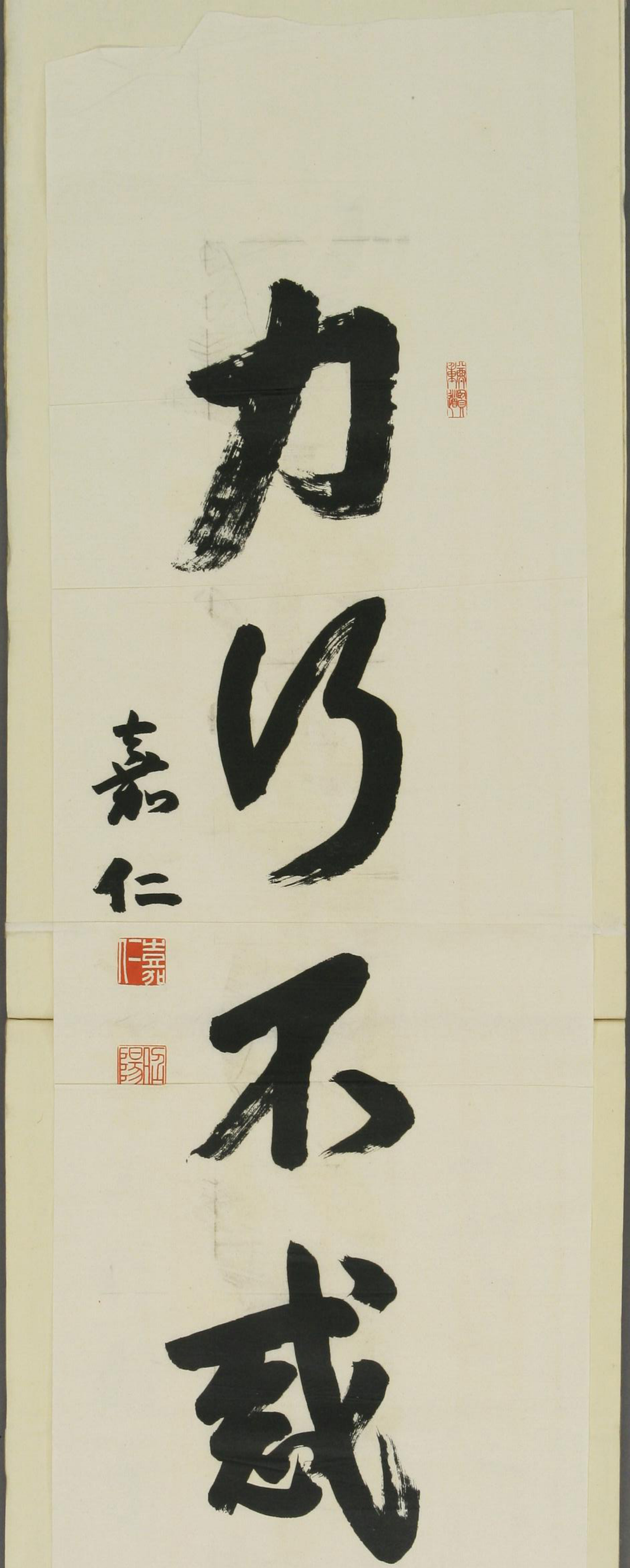
ざま
たつさまつ

●弘法大師七祖賛

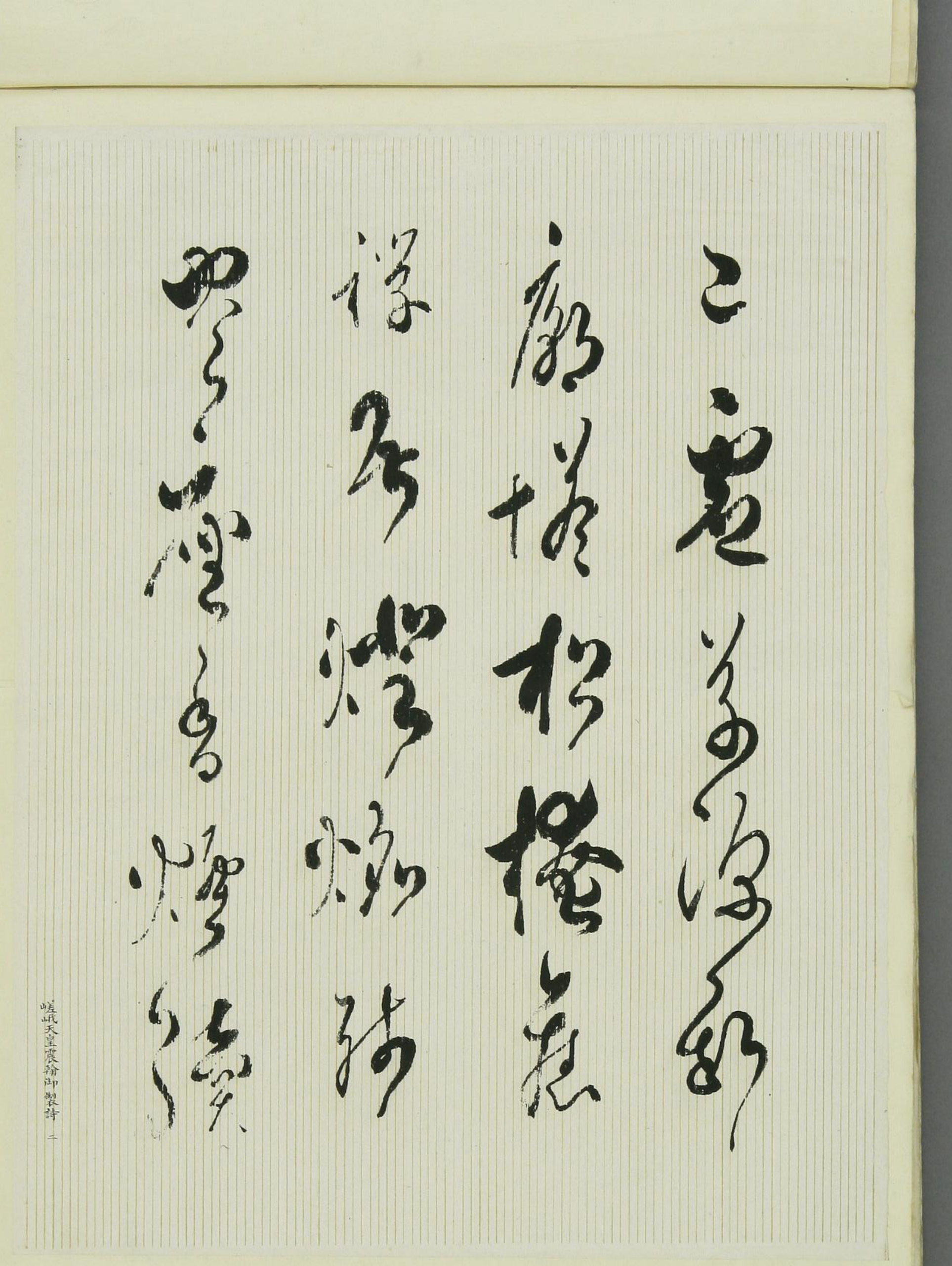
世間大師の眞迹と稱するもの甚だ多し。然れども確定疑無きものは甚だ少し。中に就て、風信帖、灌頂記等及び七祖賛の如きは、一點の疑なきものたるは、今更に言を俟たず。故に今は只此賛の書法に於て說明すべし。凡そ梵字を書するには毛筆よりは木筆を用ふるを通當とすべし。大師此賛を書するに當り梵名を主とし漢譯を從とす。故に其筆は木筆と甚だ相似たる飛白筆を用ひられたり。左れば此賛の文字は飛白の方多く、只一飛白の筆法極めて佳絶なり。木筆に揚くる所のものは、飛白

●弘法大師七副筆

世間大師の風流と申すものが多し。然れども眞筆と云ふは甚だ少し。中に就て、風信帖、灌頂記等及び七種の如きは一點の疑なきものなれば、今更に言を俟たず。故に今は只此數の名注に於て證明すべし。凡そ文字を書くには毛筆より外は不筆なり。故に不筆と云ふを通俗とすべし。大師此數の文字を用ひられたり。かれに此數の文字とは、飛白書を用ひられたる所のものにて、飛白書は飛白の方多く、几つの飛白書と云ふ相似たる飛白書法格めて佳妙なり。不識に掲ぐる所の七種に於て、特字の筆意の内、往々扁平の筆法を用ひて、已を得ざるの一法なり。今山逸史



興福寺
僧綾雅
乞詩



廣行

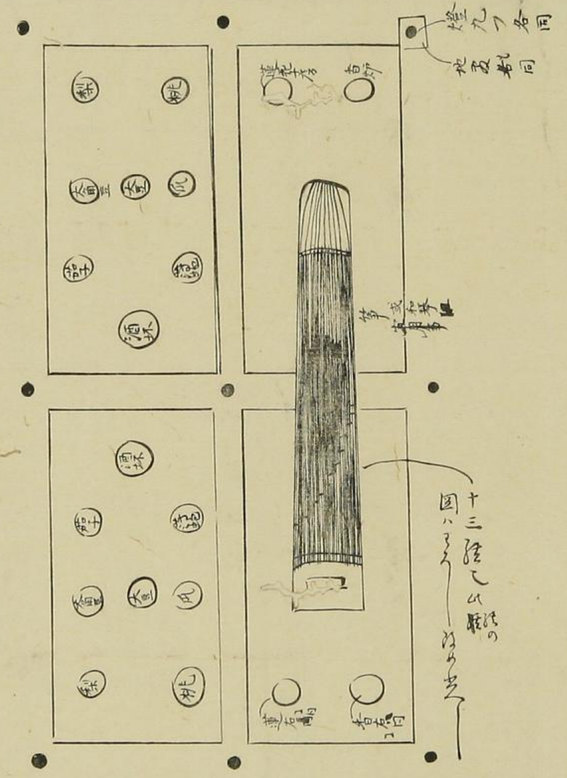
令閑院定實館圖之
清白家定誌

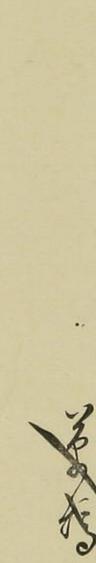
乞巧奠式

加茂真淵考
住吉廣行圖

格外宗

乞巧奠





○筆乃注ハ
花弁の筆よ
つゝ
○香ハ火舎
○花ハ蓮花の
十房或五房
朱彩の華盤一口
華盤之其義
作之可為度例

嘉永四年七月

黒河浜神名帳考原春村

御代松葉

知雄施之

天地の実れをいわきまく月日の巡りくるくる夫も乱れ
猛りつよものの五月人形うそうそ屋根線や絵ぞ
なごむも今は昔のありかそや共に
不思議やうぬこで昆の史と尋ねに
ゆれいでるほどうることろねこれあこうことかりーらやで
りのごろとりにもゆな匂神ちき忍ーやむーさびくた合戦
ちほとにも初れねれいづくいちまこれ町もなそうこれ
ちほとにも初れねれいづくいちまこれ町もなそうこれ
老もワにもうちぐーこんぐーそくうるおちくをうう
うるおちくし墓もをうくし足ひろくにげゆく中にあれ
窓ぐやはなーこまくもおそろーやさて添早のおいく
きれつ修院のろみおこれ雪の上人のゆくき風うもの
ほぼぬぐさなれをぐもおこれそこ銀ちやちほうの姫ーき
なれてれうきゆつきゆうもちまずはてるこれ対止のうる
蚊やはいもおとる外いちほどなんぎもとてもはの雪ともおりうれ
りもてねものご一ック二つめーせこてろこうなねよ
おのうんでうんををうぐみ才をうこち神やほこけこうー
くんつくいのぐなのるちのぐーこときくぐうーよ
はきるものいーねるこうぬ毒もくらもちきぐ
するれみちんふんのまーしのみちそのすーしまもこさ
そむくやいなの名出てんうおちうぐそきこ今日てん
ふんうこ再こちちく一夜はぐうでほこまれ一日
二文ぐうもーるることおくりをのみちすれやをれさめこちること迎い
ちと出せんで父母のあんやくみうぐそのようゆーが
上を藤百がよろうぐやたちてるおおいのちぐけ
きくもるに田畑ゆり来むぐあこむいちうこちくり
もるとてもゆひーおさをとおちくうづくのそてすで
一てうものちくはうぐへつこーせんぬ日がくをこ
うみそこーるおろうかるおろうみおきあ上ろ次ゆ
の食をぐーはつうふくつうおつくぜろ雪ふ
ゆはものみおはそーちんぼゆちそうおきるとふ
ねぐすーいうてるくいこねぐすーはてうくふ
なうもねよーおやまにうくめんぐすーまふ
実こ春平のゆうぐこやーー

笑とふ天地の代はんめくうぐ父母やこ人はおんをのぶこ

御台命

人は一生を童ゆを負くをねこを切ぐ
不思ちーつ雪ぬぐ切ゆりも当ろるおめ
歌とありひ縁ーのちうちりて負る事ふ
人で雪ちおぐるうをぐるうぞおまこ

牛一代歩りのよーなをーと毎